

方向

第二〇号

一九八二年十月三日発行

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

わたしの兵隊手帳

(三)

赤谷明海

へ※昭和十九年〇八月十七日 晴

※生とか死とか

病床に横たはつてとりとめもない事を思ひ、或は横の戦友とあれこれ語り合ふとき、その話柄は兎角食物の事
に關し勝ちである。中でも皆が皆まで甘いものにかつてゐる。従つて甘い団子やアッコ餅や菓子のお話が出て
は故郷を想ひ過去をなつかしむ。そしてこういふとき——単なる食物に關するだけなのに、お恥しいへことへな
がら、自分は再び故郷の土を踏みたい、言ひ換へれば生き長へ永へらへてかへりたいといふ欲望が起る。

親の顔が浮び、兄や姉の聲が聞へこへえ、妹や弟の笑顔が見えるとき、自分は矢張りかへりたい。それが叶は
ぬまでも、とにかく生き長へ永へらへてかへりたい。

自分の曾ての故郷での生活、山や川や野や里にからまる曾ての生活。京都・奈良に於ける曾ての生活、その生
活を囲む雰囲気ともいふべき自然の美、これが又自分に生の欲望をかきおこし、その生活の内容ともいふべき種
種の事柄、例へば学業・事業・趣味・交際等々、かういつたものがすべて 自分に生き永らへて再び以前のもの

を継続し発展せしめる事を要求する。

こんな事を思つてみると、どうあつても生きてかへることを願ひ、或は生きてかへれぬ場合のあることに思ひ到つては、いらいらとした気持ちに苦しめられる。

然しながら、こんな考へや感じを起してゐるのが何時もの事ではない。時として、たが諦念的を割り切れた静止の状態にあることもある。例へばかうである。甘いものが食ひたい。然し食へばあき、又離れば食ひたい。つまり止るところがない。愛する妹、あれの笑顔を再び見たい。然し何時かは必ず別れねばならない。もうこれで見れないとしたところで、三度見るところを二度見たと思へばすむ。学業や仕事や何やかやが自分を待つてゐる様に見える。どうせ大海の一粟へいちぞくゝの如き我々人間の存在、大きい目から見れば自分等の存在など問題ではない。自分がゐなければ招山へしようざん・唐招提寺ゝの存立が危い訳でもなく、今後自分が相当学績を残した様に思ふときがあつても、案外学界の為に何程の事も無いものだ。然も天才と云はれる程の人々が、今まで学なかばでたおへ※原漢字・敵十死ゝれたり、又その業績が湮滅へいんめつゝしてしまつたり、いろいろの事があつたらうが、すべて 蕩々茫茫々へとうとうほうほう・広く大きくはるかにゝと時の中にとけこんでしまつてゐる。又とけ込んでしまつたところで、地下に埋もれたところで、人の知る知らぬに關はず、務めはげんだそれだけで価値がある。自分の前生涯が、兎角輕安やらんへ※原漢字、心十頼ゝ情へなまけるゝに走り勝ちであつたもの、さ程悔い悲しむ程の事もしてゐない。普通の人間らしい人間として今まで生きて来たのであるから、又今後生き永らへたところで欲望に制限のないことであつてみれば、現在に於いて生命が断滅するとしても、左程おし

い事でもならぬ。

特に人間は或程度運命に支配される。この運命とは 種の「宿命」或は「天命」に近いもので、「運命は自己によつて開拓出来る」といつた種類のものではない。勿論「宿命」といつても前世の存在が信ぜられず、「天命」といつても「上天」「天帝」の思想がピンと来ない自分は、この運命を通俗的にいふ「運」として言つてゐる。この運なるものは、我々の希望や祈願の彼方に敵としてあるものであるから、すべてをこの者の手に委へまかせ、時の流れに身を托すより仕方がない。へ揚子江や岳州での爆撃の体験が運命觀に響いているか。✓

或る日の自分がかく思ふのであつてみれば、この或る日を成るべく多くし、何時も安んじて運命の黒白を泰然と迎へる事の出来る自分でありたい。

○八月十八日 晴

長い間行動を共にして木た欄山へ何とよむか、今では忘れてしまつた※トチャマか？✓が後送になり、一緒に退院しようとして約束してゐた夏川氏が病勢悪化して下の部屋に降りてゆき、知つた者の殆どゐないこの四階の天井裏部屋で最も古い者の一人として残された自分も、やがて程近く退院するだらうし、今の間はこの病院の様子を記して置くこととしよう。

武昌陸軍病院。これはまことに堂々たる外觀を備へてゐる。内容といふことになる病院といふのが問題であるが、外觀といふのはその建物が問題。即ち前身の武漢大学の建物に就いて語ればよい。今はこれのみにとどめ、病院の内容については他日に譲る。

武漢大学は確に堂々たる外觀である。丘陵地帯に位し、その丘陵を特に好もしげに、殆どけずりもせずへに利用している。一丘に本館を置き、他丘に図書館を置き、その中間の凹地を運動場とし、それらの付近に種々の建物を付屬せしめてゐる。

本館は現在外科に使用し、左程近くへ行つた事もないので委しい事は知らないが、天蓋を重層とし、共に硝子へがらす張りノスマートな建物。図書館の方はそれを中心として東西兩翼に二大館があり、西館が吾々のある第一内科、以前は教室と研究室とを兼ねてゐた様に思はれる。この三大建物の前面には三門を開き、門より建物に至る傾斜面を巧に住居とし（南方より眺めた場合、三樓門をはさんで三階建となり、上に来ればその屋上は地面と平行）多分寮舎に使用されてゐたものであらう。東大館の更に東にも大きい建物があり、その他小館も多く、殆どすべてがるりへ※原漢字ノ瓦へ青瓦ノでふへ※原漢字ノかれ、いずれもが細部にまで意匠をこらしてゐる。特に図書館などコンクリート（或は煉瓦）で作られてゐるが、外觀は木造式で、垂へ原、木十垂ノ木・象鼻・長押等が用ゐられ、隅々の彫刻など技巧をこらしすぎたきらひはあるにしても、如何にこの建物が金にこらし、日をこらして作られたかが明らかである。

支那の風光には未だ親しみ難いが、朝夕の雲の色の美しさは内地以上であり、赤や紫の雲が棚引いたときは、この建物は美しい。南京で見た時はルリ瓦の色をよいとは思はなかつたが、強烈な太陽の照りしきる真青な空の下と、この朝夕の空の下とでは、確かにこの色ならではと思はされる美しさを現して来る。

○火野葦平（文芸春秋）「頭と形」へ以下二点、記載の時と所 不明ノ

昨日まで、広汎にして豊饒な思惟がわれわれの誇りであつたが、兵隊となつたとき、いまや簡勁にして単なる収縮がはじまつた。

○或日へあるひへ思ふ 軍隊ほど簡勁な所もなければ 軍隊ほど煩鎖へ※瑣へな所もない 明白な陰の暗黒 礼儀の蔭の無礼

○湖南の夏暑し(八、二八) へ八月二十八日はまだ武昌に入院中。この二日後に転送へ

こゝに来て三つきくらせど庭草の葉末に光る露をまだみず

赤茶けの道並び行く患者等の病衣に踏へ踊る真夏日の照り

○9・8 南京第一陸軍病院 へ9・8 は九月八日。以後、日付は消していない。へ

涼しくなるのを待ちこがれてゐた武昌での日暮しが、不図へはからずへも此方に後送される様になると、急に涼しくはなるし、後送続きの自分の生活を顧みて、急にせはしげな気持になつて来た。早く所属の部隊へかへらねば：

この病院も武昌と同様学校を使用してゐるもので、元は中央大学である。然し両病院の感じは大分違つてゐる。武漢大学は地形の奇を好み、外形の美に特に意を用ひてゐるが、この大学は平坦な地面に広々と位置を占め、平凡ながら堂々と堅実な手法によつて建てられてゐる。前者は建物に凝つて庭内をおろそかにしてゐるに反し、後者は内地の大学に見る如く、苑内は広々と芝生や植込みによつて飾られ、それが役立つてか或は事実歴史が違ふのか、前者の何となく成り上り者といつた感じに比べて、これは血統正しい旧家の様である。又この事には南京

といふ古い都会がこの様な大学の雰囲気を自然に生み出してゐるのかもしれないといふ事が考へられる。美しく手の入れられた芝生の上を歩き、しつとりと朝露に濡へぬゝれてゐるのを知つて、限りないなつかしさを覚えた。武昌あたりの気候ではこの露の感触を味ふことなど到底出来ぬことである。此方の方が余程気温が下るらしい。

この病院の設備、これについて自分の部屋——第一内科第十九号室——の事を例としてとり上げよう。七間に二間半程の部屋内に、一列に寝台が八台並べられ、その各々には何処の病院にもあるあの背高の手箱がついてゐる。広い藁蒲団の上には立派な軍毛へ軍隊用毛布ゝ・敷布・包布（パケット）・覆付へおおいつきゝの枕等一式揃つてゐる。棚の上には時花が挿され、人形さへ飾られてゐる。ラヂオがとりつけられて、必要な報道等はねながら聞くことが出来る。これだけ部屋の様子を言へば大概全体が察せられ、武昌の病院等とへはゝお話にならない。所謂へいわゆるゝ病院らしい病院（内地人の観念にある病院）であることが知られよう。

次に給養。我々にとつて給養は一番の関心事である。武昌で毎日カボチャを食はされ、船中へ武昌・南京間は揚子江の船。夜間のみ航行ゝ杓と砂だらけの麦飯の食はされた自分にとつて、此処の食事は正に驚くべき美食であつた。五日へにゝ入院して今日で足かけ四日、その間おはぎも食ひ、パンも食ひ、天プラも食つた。その他すべての菜が同じものを避け、味付けに心が配られてゐる。量も多い。この事は設備の問題と関連して、「我が身に余る」といふ感を与へ、国家の厄介人としての自分が大きく意識され、今まで味はなかつた心苦しさが現はれて来た。下給品へ無料支給品ゝも多い。酒保品へ有料支給品ゝも多い。既に旭日へたばこゝが手箱の中で八個も積まれてゐる。蜜柑のカンへ缶ゝ詰も与へられた。全く勿体ない事である。

最後にこの内務について記しておかう。武昌にゐる時、よく南京の病院の厳しさを聞いた。苦しまぎれに嘘を言つて退院した者もある等とさへ聞いた。へ鬼の南京、ジャの奉天」とのうわさ。さて来てみると内務は確かにやかましい。八時、十五時のラヂオ体操をはじめ、勤労的な事が相当あり、起居に関する諸規定が実際に行使されてゐる。然しこれらはすべて室長の意志によつて、緩急何れへなりと移るへすゝ事が出来る。或部屋では長々と日夕点呼後の学科をやつてゐる。でも自分等の部屋ではその様なことはない。又食事上げの当番等は人数の都合で大きい部屋から出るのでへメン上げは病院でも初年兵の仕事、自分としては特に恵まれてゐる訳である。(部屋長の藤木五郎甲幹軍曹殿は有名な藤木アチャコヘンタツかゝの実子)

○臨城付近所見(九、一二) へ九月十一日また後送、列車で北に向う

畑中に三つ墓あり真中は小さき塚ぞ子の墓ならん

○9・23奉天にて へ天津を経て、九月十五日奉天に着く、

何といふ碧潭へ落ゝの空か。深く深く広々と拡へひろゝがる真青な空である。日本の秋空も美しい。然し満州のそれは尚更高々と伸び、深々と澄んでゐる。この清澄な空を極めて、鮮かに劃へかぎゝる二棟・三棟の煉瓦造りの建物。建物の下部をさへぎるポプラ等の植込。植込の前のバスケットボール板や肋木・金へ鉄へ棒等。これらが今居る病室の窓から見える景色のすべてである。あくまでもすみきつた空気と、如何にも鋭い光線が、建物や木や土を一分の隙へすきゝもない程にピンと張り切らしてゐるへつめてゐる。その強烈な緊張感を破る何物もなければ、何物も出て来ない。奉天の陸軍病院の分院として、還送へかんそうゝ病棟として臨時借用してゐる

る満系へ満州人系へ国民学校（新高校及びそれに隣接する満州中学校？）の中の一部の眺めがこれである。これを眺めながら、もうすでに十日間を過して来た。――床へゆかゝの上に坐りながら――。ここではこの景色を眺めてゐても、この景色の中に身を置くことの出来るのは飯上げの使役として出た数分間の事。他は許されてゐないし、勿論その景色の向ふへ足を延へるのは出来ぬ。建物の中も猥へみだゝりには歩けない。便所と洗面所とへ通ズル^{ママ}二十間程の廊下、これと十間十二面へ間口十間、奥行十二間程の病室内と、この二つだけが吾々の足の踏み場である。他は一切へいっさいいけぬ。そして吾々は一日中この病室に、疲れた身体を右手に支へ、或は左手に托して、一日の長きをかこつてゐるのである。それが今日で既に十日程になつた。へここで内地還送と現地療養とに選別。現地療養のほくらは遼陽へ。

○児童らの挙措敏捷へきよそびんしょうゝが病む我をさびしがらせて秋の日暮るる（九、二二）
○懐母　九月二十七日の前日に遼陽へ転送されているゝ

片岡の蔭敷く稲田刈り終へて今母そばの日向に佇へたゝちぬ（九、二七）

○へまた食物の製法――さつまいものもち、ショウガ菓子、カステラ、やきもち、ちまき、カリン糖、甘納豆、牛皮へ求肥ゝ、すはま、等。日本酒の製法もある。いま略す。ゝ

夜　来　庵　か　ぜ　だ　よ　り　　―若い日の森田曠平―

（三）

原田憲雄編

へ一九三六（昭和十一）年　三月九日　十日午後消印、手紙。水干町。

枯魚子大兄、

第一　小生君の精力にほとほと感じ入つた次第。あれだけの歌を作るのには相当の心構へと用意と時間があるだらうに。僕等の様な一日五首平均、（それも作らぬ日もある）では上達がおそいのも宜なるかなだ。今度の君の歌は　酒の歌を除いて何時もよりずっと好きな歌があつた。こまかいことは言はず　大体感じたことを言へば酒の歌には何となくわざとらしい所がある。「酒のまば此のくるしみ：：」の歌以外は僕は好きでない。やはり真に酒の気分が出てゐない様だ。例へば「酒のまば此のくるしみ：：」の歌以外の僕は好きでない。やはり、なしの所は同意出来るが、の所はいけない。（歌の良否でなしに）この作者は暴飲家だ。酒のめのめよオとカフェーへくり出す輩だ。しかもこれは日本酒ではない。ビスキカジンの様だ。もつと静かな真の酒の歌がほしいと思つた。「窓ひとつあけてほのほの」（このほのほのはキザではないだらうか？）「真葛湯の玉にも：：」「酒のまばこのくるしみ：：」「試験の：：」「夜深く街はしづもり：：」「うすらさむき：：」の諸歌は実感が出てすきだ。試験のうた特にい、と思つた。無条件で激賞する。今までの君の歌のうちで一番すきだ。すてばちにうつちやつた所　その感じ、等　相当の歌人の中に出しても見られるものだと思ふよ。

僕は展覧会が近づいたので絵のことで一ばいだ。（歌もろくろく作れない。）毎日相当苦心してやつてゐるのだが思ふ様にいかぬので悲観してゐる。それからみると　歌は専門外だから楽しんで作る。その点幸福だよ。だから少しも恐れずどんな歌にならうとかまはないから、楽だ。しかし新傾向の歌はきらひだ。

吾妹子を紹介せよとのことだが 平凡な普通のメイチエンだ。期待してもらつてはこまる。平凡以上かもしれぬから。しかしやはり人間の血はかよつて 美しい乳房はある。賢くはない馬鹿な女だがすなほだ。それがとりえ。大体僕は女が賢いのは嫌だ。君も浮図の家へ寺へに生れたのだからと言つてかたい事を言はず女の友達でも持ち玉へ。又気がはれるかも知れないから。

沢田へ宗山へ先生の所へ行く迄に一度君の家へ行く。何かと色々話もあるし 一度行つたらめつたに会ふ機会もないのだから。明日は伊谷へ賢蔵へさんの所へ絵を持つて行くことになつてゐる。今 男の顔を描いてゐるがうまく行かぬので弱つてゐる。何とか出来ないものかと日夜苦心してゐる。だから 此の頃の歌は一首もない。展覧会の目録は大体次の通りだ。

- | | | |
|--------|-----|------|
| 一、娘 | 五〇号 | 二〇〇円 |
| 二、残雪 | 三〇号 | 一〇〇円 |
| 三、友禅工場 | 三〇号 | 一〇〇円 |
| 四、洛北風景 | 五〇号 | 一〇〇円 |
| 五、肖像 | 二〇号 | 五〇円 |

どうだ すばらしい価格だらう。これが皆売れたら 半分君にやらうか。

原田学兄欄下

裏面へ少し歌を置いて置いた。

曠平

死を待つ人

今はただ 死を待つのみとなりし人の 窓にさびしも 星空のあり
星空は さびしからずや その星を静かに眺む 死を待てる人
星空は さびしからずや 死をまてる 人おほほしく 息づきにけり。

竜安寺。

相阿みの 作になるてふ 竜安寺の いはほの下の 青き 苔かな
松の葉の かげに静もる 石庭は 虎の児渡しと 聞えたりけり。
松の葉の かげに静もる 石庭の いはほは いたく さびにけるかも。
ふかくさびし 土べいの上の 松の葉の はさまより 見ゆ 洛南の山
本堂の廊下は さびし しんとして わがはく息の 音のみ聞ゆ。

池

松の木の 枝落すかげに 白雲の まぢかく見えて 動かざりけり。
池水は しづかに よどみ 折々に 聞ゆる音は 竹をきる音。
松林に かこまれし くりに 師の坊と 二人坐れば 篋の音す。
くりぬちは 静かなるかも しみじみと 玉露を吸へる 師の坊と我。
篋に ひと ひとりゐて 竹を伐る 音は裏葉に しみにけるかも。

モデル

研究所の モデルは あはれ 床の上に ひく、こどもり 英語 書きをり。
だんろは あかあかもえて 若々しモデルの 乳房 赤みゐたるも。
美しき 乳房と 小さき腹もてる モデルは立ちて 動かざりけり。
足をあげて ポーズを作る その腹は 息するなべに 動きつるかも。
横にふす モデルの乳房 寝台の さらさの中に 息づきにけり。
さらりと 着物をすて、 そのまゝに 歩むモデルの 腿の太さは。
をとめなる モデルはあはれ おどおどと 着物をすて、 椅子に近よる
わが使ひし モデルは居らず 新しき をとめのをりて ポーズしにけり

春の夜

ある後家さんの歌へる

おぼろ月 わがせこ居らず 聞さびし この春の夜を 何とせうぞの

わが歌へる

わが膝の 女は静かに ほ、えみぬ 唇ぬれて 何を求むる

さにづらふ 眼の下の 涙痕は あはれをとめの 名残ならずや

おぼろ月 ほのかに今宵てるものか 君の息吹は かすかなりけり。

やはらかき 君の乳房を 我だけば つぶらなる目を 伏せにけるかも

乱筆御無礼

へ森田氏は一九八二年八月一日夜付の手紙で、本誌第十九号一三頁「二月二十九日」付手紙を解説。この手紙にも関連するかと察し、左に引いておく。

夜来庵かぜ日より 小生も楽しみにしているのですが、歌にもならぬ歌と
か驚きました。本音をいえば モデルになつてくれる娘達のことを ちよつとい、カッコウをして 吹聴して
みただけです。今から 五十年近く前のことだから 記憶がうすれているけれど 三人位の肖像をかいて
いるようです。一人は 早く肺で他界しているのですが、はからずも 彼女を偲んで 仏を念じておきま
した。(二人目) 私の手元に浴衣を着た日本画の作品があり、これは 昭和十四、五年の作品で、モデ
ルの女性は今でいうアルバイトで頼んでいたのですが 気立のよい子だったので、故人になられた(異色
の美人画家) 甲斐荘楠音さんにも紹介してあげたので 四五枚の作品がある筈です。私のは四枚保存して
あるけれど 油ではないので ちよつとずれています。この人は音信不通です。(三人目) もう一人は商
家のお内儀になつて 健在であり 昨年の回顧展の時に来てくれたけれど 四十余年の歳月が流れて い、
婆さんになっていました。結局 モデルは誰だか分らないけれど、一方 溪流の方は覚えていません。たしか
3号の板にかいた作品で「これは僕の非常に愛着のある」と書いている通り よほど気に入っていたのでせ
う。:::尚 夜来庵というのは 土佐の民謡ヨサコイからとつたので、多分 何人かの高知県人が使用

しているものと思います。

如 夢 令 一 李 清 照 (二) 一

原 田 憲 雄

李清照には「易安居士」(いあんこじ)という筆名がある。濟南、今の山東省濟南市、の出身。李格非を父、王氏を母として、一〇八四年に生れた。というのが定説である。定説に対しては異説があり、その考証も興味はあるが、ここでは特に必要な場合以外は立ち入らぬこととする。伝記よりも、彼女の作品を読むことを本稿の主眼としたいからだ。

李格非、字(あざな)は文叔(ぶんしゆく)。生卒年は不明だが、一〇七六年、進士の試験に合格し、冀州司戸参軍を振り出しに、太学正、校書郎、礼部員外郎を経、京東路提点刑獄に至り、政争にまきこまれて追放され、死んだとき六十一歳だった、といわれる。若いころ、文豪蘇東坡にその才能を見出され、文名高く、文集四十五卷、研究若干があったというが、現存するものは『洛陽名園記』一巻だけ。その一巻は名著として今日もよく読まれる。

王氏を、王拱辰の孫とし、王準の孫とする両説がある。拱辰(一〇一二—一〇八五)は強直で知られ、彰徳軍節度使で終った人。準は、元豊(一〇七八—一〇八五)中の宰相王珪の父で、漢国公。いずれにしても名家であり、王氏その人も学芸の才があったらしい。

清照の生れた一〇八四年は、趙氏を皇帝とする宋朝の第六代神宗の元豊七年にあたる。汴京、今の河南省開封（かいほう）市、が首都だった。日本では白河天皇の応徳元年で、『後拾遺和歌集』成立の前後。紫式部・清少納言・和泉式部の活躍した時代と式子内親王が清新の歌風をのべた時代とのほぼ中間にあたる。そうして、西洋では、十字軍の起こる約十年前、女性の文学者でわれわれがその名を知る人はない。

清照がどこで生れたかはわからぬが、その出身地の済南をはじめ、父の任地などで育ち、それらの風土と、環境、父母の知友との交遊を含むその家庭から影響と養いを得て、育っていったのであろう。それらの分析追究は専家に任せて、ここでは、彼女の初期の作と思われる「如夢令」（じょむれい）を読もう。

ずっとおぼえています 溪のバンガローの日ぐれ／すっかり酔って 帰り路しれずになつたこと／興尽きた
とき舟を返すにおそすぎて／うっかり蓮の花の深みにはまりこんだ／どうしよう／どうしよう／驚いて飛び
たつ水の面のかもめ

これは単調、すなわち前後段に分れていない、短い詞である。後唐の莊宗が始めた調で「憶仙姿」と名づけたが、すっきりしない。詞中に「如夢」（夢のよう）の句があるところから「如夢令」と呼ばれるようになった。

さて清照のこの詞、じつは王維の「皇甫岳が雲溪の雑題 五首」から本歌取りした。本歌はわたしの『王維』（中国詩人選・6、一九六七年）の一〇六一—一五頁に訳注解説する。全部を引いておきたい気はするが、長す

ぎる。訳文だけお目にかける。

人 ひっそりと 木犀の花 はららぐ／夜しんとして 春の山のほがらかさ／月が出た 驚きさわぐ山鳥／
しばらくすると 春の谷間で 鳴いている (鳥鳴く谷)

「昨日だって、今日だって、蓮を採りにいったんだ。／なにしろ遠いむこうの洲だから、たいてい、帰りは暮れになるんだ」／「棹ふりまわして、水をはねてはいけないよ。／紅蓮さんの着物をぬらすとわるいから」

(蓮花のつつみ)

さっと 紅蓮のあたりに もぐり／また 輝く水辺から飛び出して ゆうゆうと舞う／ひとり立ってはいる
もの なんとふわふわしていることか／古い浮木にのっかって 魚をくわえて (鶉のいせき)

朝から耕す シャン・ピン・ティエン／暮でも耕す シャン・ピン・ティエン／渡し場みちを問ふお方／知
つておいでか 酒・瀬へそ・できの賢を (上平田へシャン・ピン・ティエン)

春の池は 深くって 広いのさ／スマートな舟が 廻るのを 待っているのさ／なよなよと 緑の浮き草が
閉じたって／しだれ柳がそつとはらえば また開くのさ (浮き草の池)

一見、上品な自然詠。Batterieが裏打ちしてある。「如夢令」にかえる。

常記 深亭日暮。沈醉不知帰路。

わたしはおぼえています、あれからずっと、あのときのようにまざまさと。それが「常記」。なにしろ、まっさらのノート最初のページに、くつきりとあなたのお描きになった絵ですもの、と女の口調はいつている。処

は溪谷の小亭、時は日暮れ。小亭は小説『紅樓夢』に出てくるようなそれだが、『紅樓夢』より『クレープの奥方』に親しむことの多からう読者のために「パンガロー」と訳しておいた。「沈醉」は、酒に酔ったと限らぬ。また酒にしても少女はひとくちのベルモットにも気を失う。どうして帰ったのかわからない……

興尽晩回舟、誤入藕花深処。

その日は朝から舟遊び。お天気はいいし、まっさおな空には絹わたをちぎったような雲が飛んでいるし、風は肌をこころよくなでてゆく。遠くから見ていたときはつんと冷たい感じの太学生が、ふたりつきりでむかいあうと案外やさしく明るくて、陽にやけた顔はあどけない。「僕のは考古学だから、本も読みはするが、あちこちの碑の拓本をとりによくのが忙しくって、まあ労働者みたいなものさ」と白い歯を見せて笑う。舟は溪流をさかのぼる。「きみは『子猷訪戴』って話してるかい」と青年。まあ、なにも知らないと思ってるのね。『世説新語』は少女の愛読書のひとつ。「任誕」第二十三の章の何枚目にその話のついででどういふ文章であるかもそらんじている。しかし少女は黙って聞く。青年は少女に自分の知識をひろうるのがうれしくて仕方がない。

昔、晋の代に王子猷という人が山陰に住んでいた。ある夜、ふとめざめると、外は雪らしい。窓をあけると、一面の銀世界。うれしくなってひとり酒をくみ、庭においてさまよううち、左思という詩人の「隱士を訪ねる」詩の「山かげにつみし白き雪」の句を思い出し、吟じると、川上に住む友の隱者戴安道を訪ねたくなり、小舟をこがせ、夜どおし川をさかのぼり、その門前に着いたら、友にも会わず舟を引返えさせた。人がそのわけを問うところ答えた「興に乗って行った。興が尽きて帰ったのさ。戴君に会わなきゃならないわけじゃない」

「『興尽きたり』といって引き返すところ、なんとも風流だね」と青年は結んだ。

「でも、お酒を見たらいい機嫌になって酔っぱらい『返るを忘れる』ところ、大したものさ、といったのは、その子猷の弟の王子敬だったのじゃないかしら」と少女。

「まいったなあ。きみがそんなに『世説』にくわしいとは知らなかった。人が悪いや、黙って最後まで言わせておいてシッペイくらわすなんて」

それからがいけなかった。いままでひとり含んで、さすことは遠慮していた酒を、青年は少女にさした。ことわると「おやおや、きみの『大したもの』は口先だけかい」。負けず嫌いの少女は、つい杯をのみほした。舟遊びのたのしさはもう終っていた。だのに、引きかえすにはおそすぎた。

「昨日だって、今日だって、蓮を採りにいったんだ。たいてい、帰りは暮れになるんだ：：先刻ご承知だろうが王摩詰先生の詩だ。暮れにはまだ間があるよ」

「棹ふりまわして、水をはねてはいけないよ。って注意してるのもその先生よ」
「こいつめ」：：

そんな対話をくりかえしているうちに、蓮の花むらの深みに入りこんでしまっていた。

争渡。争渡。

どうしたらここを切りぬけて向うへ出られようか。どうしよう。どうしよう。おたがいにそう思いながら、深くって広いその花むらは、開くと思えば、また閉じる。

驚起一灘鷗鷺。

やっと花むらを出たと思うと、そこはさらに危険な場所だった。「水浅く、岩石多く、流れが急で、舟行に危険なところ」と字書は「灘」を説明する。「驚起」の二字には「月が出た 驚きさわぐ山鳥」の驚惑と悲痛と甘美が響応映発して幽奇艶冶で、さすがに少女の作らしく、はつらつとしている。

清照のこの詞。構造からいえば王維の五首を『世説』で串ざししたかたちになっていて、なかなか複雑な作品だが、出来上りが簡素単純で、仕組みにかけた苦勞なんぞはこれっぽっちも人に見せぬ。「深く入って浅く出るとはこういう作をこそ評することばであろう。

暮、路、処、渡、鷺、が韻字。「争渡。争渡」と、ここでたたむのが「如夢令」の正体。舞台にあげた青年を、太学生としたのは、一一〇一年、十八歳の清照が結婚した相手の、二十一歳の趙明誠が、そのとき太学生だったからだ。

ふたりが、「如夢令」にわたしが解説したような事件を前提として結婚したというような説はどこにもない。証拠もない。一つの可能性を見出しうるかもしれない。すでに結婚してこの作が出来たものとし、相手が夫でないとしたら、いよいよ危険な心情を歌ったことになる。

さきにも言ったように、詞は虚構を許す文体だ。作者の生活の実際と結びつけることはいらぬ。それだけに、感情・志向が端的にあらわれる。

「子猷訪戴」は、理性が行為を中絶することによって、夢想の消滅を阻止し、幻想の維持拡大をはかろうとす

る美的態度のいさぎよさをたたえるエピソードだ。いさぎよいだけに、たちまち亜流が生れ、俗化がはじまる。はげしい決断によって創出された態度も、亜流にとつてはエゴイズム弁護の手段にすぎない。俗化のはて、女を捨てる男が子猷をきどつた。

酔わない酒は酒ではない、おほれぬ恋が恋であろうか。そんなはげしさが清照の作品の底流をなしているようだ。おほれた結果が見えないわけではない。おほれまいとする自制がないわけでもない。しかし、理性も意志も及ばぬ暗い力がおのれをつき動かして、われにもあらぬ惑溺への転落の悲哀と歎息を、正面から見つめて表現した。中国の女性としては驚くべき大胆さである。大胆な女性は他に例がないでもないが、このようなクライシスとクライマックスを微妙正確に表現しえたものは空前であつた。

彼女に「詞論」がある。「如夢令」とほぼ同じ頃の作だろうと推察する。詞の歴史を素描し、先立つ作者を論ずるが、男性の大家を、こてんこてんにやつつける。厳しすぎる、と一般に評判はよくないが、美点長所もちやんと見ているのだから、不公平とはいえぬ。純粹で正直すぎるため実もふたもなくなった感じは残るにしても。「詞論」については、別に章を設けたほうがよいだろう。

清照には、さらに一首「如夢令」がある。そのほうが有名で、代表作の一つとされる。確かに秀作だ。評家の摘出する句はすばらしい。しかしわたしは、こちらの方を尊重する。

(一九八二・九・一九)

一九八一年十一月二十二日

いなかへ来た。今、夜だ。昼に、昼飯を食べ、はかまいりに行き、帰って来てテレビなど見ているうちに夜が来た。いなかには、わたしたちせん用？と、おバアちゃんの家がある。おばあちゃんのうちで、テレビを見てい

お母さんは立入
をさん止する



(よほどたいへんな用が
ある時)

1981, 8.

たが、せん用の家に帰る時間になった。外はさむかった。息もこおりつきそうだ。夜空がきれいだ。カシオペア、オリオン、オレンジ色、白、黄。いろんな星がキラキラ光っている。

十一月二十五日

1 図書、 2 体育、 3 書き方、 4 理科、 給食はカレーシチュー、ご飯、やさしいサラダ、ヨーグルト、 5 音楽：： そんな時間わりに一ぺんできていいからしてみたい。

一九八二年一月五日

今、屋根うらのわたしのへやにいる。とてもすてきなへやだ。ベッド、デスク、チェア一三つ、本だな四組、たんす二つ、とだな二つ、まど二つ、カーテンはふつうのぬのとレース。天井には、柱がいっぱい。人形たくさん、ぬいぐるみたくさん、おもちゃ、ゲーム、アルバム、本だないっぱいの本、いろんなもの、たくさんのかばん、ランドセル、手さげ、スポーツバッグ、ポシエット：：。キャンデー、ろうそく、薬、ノート、教科書、ナイトテーブル三つ、カレンダー、シール、パジャマ、へや着：：。ナイトランプ、星砂、オルゴール、ストローものさし、テープ、えんぴつつけずり、ちきゅうぎ、だついで脱衣かご、とけい、水さし、カップ、かいちゅうでんとう、おきもの、キャップ、クローラー、てがみ入れ、など。

一月六日

今日は終りから一日前の日だ。書きながらもなんだかさみしい。どうして冬休みは二週間ほつちなのだらう。いろんなことをぞんぶんにやった。でもやっぱり一人はさびしい。にぎやかだった後ほどさびしい。

一月十四日

夕方、門をしめにいった。夕日が門にあたっていた。

木の門はうれしそうにキラキラ光っていた。

一月十五日

今日は成人の日だ。わたしは十歳で半分なので、「の日」だ。そのせいでもあるまいが、今日はなわとびで、201回とべた。とてもうれしかった。そのあとでぞうきんがけをした。でも、ぞうきんがけはあまりすきではな
5。

一月二十六日

今日藤井君に、歯医者さんの帰りに出合いました。オール出水へ野球試合？の帰りだったのでしよう。

三月三十日

ひこうきくもを見た。青い空に、二本の線がずうつつづいていく。あの線はどこまでゆくのだろう。

四月

いたいこと(詩)

お母さんは、教育ババだ！

うさぎのみみちゃん

原田道子

あるところとうさぎのみみちゃんがおとうさんとおかあさんといっしょにすんでいました。右どなりのうちまでしか歩けない小さなみみちゃんの右どなりは、おなっぱがだいすきな、ななちゃんです。左どなりまでもいけません。左どなりはみみの長いうさこちゃんです。

今日はみみちゃんのおたんじょうび。うさこちゃんとななちゃんがおいわいにきました。大きな大きなプレゼントをかかえて……。

みみちゃんのおかあさんは、朝から大はりきりで、みみちゃんの大すきないちごのケーキといちごのプリンと、グリンピースのピラフをつくっています。お父さんは、町へプレゼントを買いに行きました。

お父さんが帰って来た時、おとなりさん二人が来ていて、みみちゃんと、もって来たプレゼントでおおわらいをしながらあそんでいました。

それから、ごちそうがはこびこまれて、「プレゼントが何か、あてられるか、あてられないか」とお父さんがみみちゃんにきき、「わかんない」とこたえてあげたら、大きなクッションが出てきました。おおよろこびで、それにすわってごちそうをたべました。

おとなりさんとあそんでいたら、夕方になったので、おとなりさん二人は帰りました。

もつとあそんでいたかったけど、みみちゃんはねむくなりました。それで、おおいそぎではをみがいて、ベッドにはいりました。

(一九八二年一月六日)